

道南杉活用の「病室ユニット」を試験的導入。癒しの空間作りを目指す

函館中央病院

函館中央病院（函館市）では、道南杉を使った「病室ユニット」を個室1室に試験的に導入。木のぬくもりあふれる環境整備に、患者さんや家族の好評を得ている。

これは産学官で取り組んだ「病院木質化プロジェクト」の一環。道内の針葉樹は伐期を迎えた一方、人口減少等に伴って木材利用が停滞し、消費拡大が課題となっている。そこで森町の製材業「ハルキ」が同プロジェクトを立ち上げ、渡島総合振興局、札幌市立大学、内田洋行等産学官が参加し、病室での導入に向け研究、開発を進めてきた。

病室ユニットは道南杉、トドマツ等を特殊な工法で張り合わせたパネルを活用（厚さ2～3センチ）。これを病室の壁面に合わせて設置する組み立て式で、1日程度で設置は完了する。「電動ドリル以外、大きな音が出ることもなく、両サイドの病室の患者さんは入室したままで設置できた」と経営企画課の須摩直樹主任。酸素やコンセント等の差し込み口もあらかじめ位置を測った上でユニットを組むため支障はない。

導入した病室ユニットにはLEDの間接照明も組み込み、床頭台やロッカーも道南杉で製作した。病室というと白い壁のイメージがあるが、患者さんやご家族からは「ホテルに来たようだ」「自宅にいるようで落ち着ける」「木の香り、温もりが心地よい」などとの感想が聞かれ、好評という。

導入が病室となるだけに、プロジェクトではさまざまな課題に取り組んできた。「素材が木材だけ



外科病棟の1室に設置したユニット

に、血液や細菌、ウイルスなどが付着した場合、衛生面は大丈夫か」との懸念があつたが、実証実験の上、薄い塗装を施すことで解消。道立総合研究機構森林研究本部の川等恒治主査は、今年1月に札幌市立大学で開催された成果発表会で、木材にMRSAを付着させ、消毒用アルコールや次亜塩素酸ナトリウムで消毒した結果、除菌活性値は効力ありと判断される2.0を上回ったと報告している。

こうした取り組みは全国的にも例がなく、「社会的必要性も高い」とウッドデザイン賞2016で優秀賞（林野庁長官賞）を受賞。病室ユニットは昨年12月に試験的に導入したばかりで、今後は実際に入院された患者さんや職員からの意見を踏まえ製品化を目指す。